

日本とベルギーにおける社会的広域圏形成のプロセスに関する研究

清水, 李太郎

<https://hdl.handle.net/2324/1806792>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2,3）

氏 名 : 清水 李太郎

論文題名 : 日本とベルギーにおける社会的広域圏形成のプロセスに関する研究

区 分 : 甲

博 士 論 文 の 要 約

戦後から今日に至る急速な経済発展を実現した日本では、一極集中型の都市圏が各地で形成される一方、地方部では都市部への人口流出と高齢化の進行によって、広範な地域に渡って人々の生活の質の低下を引き起こしている。特に人口縮退に伴う公的サービスの質の低下、地場産業の撤退、地域コミュニティの機能低下などの様々な社会問題の解消が模索されており、都市部と地方部の関係を再編することによって、多様な世代間の交流の機会と社会的関係性の創出、地域社会のコンテキストの再生、新しい地域の発展への主体的な関与の機会の創出など、地方部に居住する人々の多様なニーズを充足させる広域圏の形成が求められている。

そこで、本研究は以上の背景を踏まえながら、社会的に持続可能な広域圏形成のプロセスを巡る欧米諸国の議論を整理し、広域圏の発展のプロセスに関する理論的枠組みに着目して、田園地帯と市街地が混在するベルギーと日本の地方都市を対象に交通インフラストラクチャ、景観資源及び空き家などの余剰空間を活用した社会的広域圏形成プロセスを創出する要件を体系的に明らかにし、都市部と地方部の再編に有用な情報を提示することを目的とする。

本論文は6章で構成されている。

第1章では、序論として、本研究の背景、研究の目的、研究の対象、研究の方法について述べ、欧米における広域圏形成の理論をレビューしながら、衰退する地域におけるインフラストラクチャの重層的活用を通して、多様な社会的関係性の形成と社会的ニーズの充足を促進させ、広範な地域に新しい発展の機会を創出する社会的広域圏形成プロセスの理論的枠組みを提示した。

第2章では、ベルギーにおける都市部と地方部を結ぶ鉄道交通の重層的活用に着目し、文献地図の分析及びアンケート調査を行い、都市と地方の間の移動コストを軽減するアフォードブルアクセスと呼ぶシステムを導入した経緯及び公共交通の活用による社会的広域圏形成プロセスへの影響を明らかにした上で、若年層の多様な社会的ニーズを充足させると同時に、鉄道交通の活用によって広域圏の全域に市街化の機会を均等に与え、都市部と地方部を一つの生活圏として形成していることを指摘した。

第3章では、ベルギー北部に位置するフランダース地方で1990年代に考案されたサイクルポイントネットワークに着目し、文献調査と地図分析を通して、ネットワークの整備過程と詳細な空間特性を把握した上で、生活道路にサイクルポイントを設置するというシンプルな仕組みを導入することによって、様々な地域資源の活用と景観を体験できるネットワークが形成され、サイクルツーリズムという新しい余暇活動の機会を創出し、都市的活動の乏しい地方部の生活の質の向上に貢献していることを明らかにした。

第4章では、福岡県筑後地方で複数の自治体と住民の関与によって策定された広域景観計画に着目し、文献調査を通して多様な住民参加を伴う策定プロセスの特徴を明らかにした。特に景観に関

わる知識と景観資源の情報を提供するという住民参加の形態が地域のコンテキストの合理的な解釈と直接的な計画案への反映を可能にしたこと、多様な社会的交流と連帯意識の形成を促し、広域のガバナンスという新しい発展の可能性を提示したことが、社会的広域圏形成プロセスの創出に果たす役割が顕著であることを指摘した。

第5章では、空き地や空き家などの余剰空間の活用による社会的広域圏形成プロセスの特徴を明らかにするために、瀬戸内海に位置するアートサイト直島を取り挙げた。文献調査を通して大都市圏に拠点を持つ民間企業が、人口縮退に伴って生じる空き地や空き家などの余剰空間を活用し、創造的な空間開発を集積させ、戦略的な拠点形成とイベントの開催に結びつける再帰的プロセスを経て、地域住民を始めとする様々な主体の立場に応じたボトムアップ的な活動を展開することによって、アートサイト直島のプロジェクトとの相乗効果を生み出し、都市部と地方部の間のような人的な移動と交流を背景に、瀬戸内海の地域再生への発展的展開が社会的広域圏の形成に繋がったことを明らかにした。

第6章では、本研究で得られた知見を総括し、まとめとしている。